

教育実習の講義実践報告

井 沼 学

1. はじめに

本稿は、2017年度に著者が担当した城西大学理学部数学科（紀尾井町キャンパス）4年次の講義「教育実習Ⅰ（事前及び事後指導を含む）」の実践報告と反省である。学内での講義は、初回のオリエンテーションを含む7回の事前指導と2回の事後指導を行い、受講者は16名であった。以下では、第2章で講義の狙いと概要を述べ、第3章で講義の振り返りを通じて見えた課題と著者自身の反省を述べる。

2. 講義の狙い

現行の学習指導要領では（次期学習指導要領も同様）、学校教育の具体的な目標としての次の3つを挙げている。

- （1）生徒の思考力、判断力、表現力、主体的に学習に取り組む態度を養うこと。
- （2）生徒の豊かな心や創造性を涵養すること。
- （3）生徒が生涯を通じて健康で安全な生活を送ることができるように、そのための基礎を培うこと。

教育実習に臨む学生たちには、これまでの学習内容を踏まえてどのように上述の目標を実現するのかを明確に説明できるようになってほしいと考えた。そこで、事前指導は、毎回、ある1つのテーマについて、事前に小論文のレポート課題を与えておき、学生がその課題について自由に意見を出し合って議論する形式の講義を行った。講義中、著者は、学生の意見を黒板に書き留める書記

と、学生の意見に対してごく簡単な補足やコメントを述べて議論を進行させる司会を務めた。そして、講義後にレポートを回収し、添削して、次の講義で返却した。

事後指導では、各学生が約10分間の実習報告を行った。

3. 講義の振り返り

講義を通じて最も気になった点は、学生の小論文や議論の中身に独創性（創造性）や具体性が欠けているという点である。例えば、講義の第4回では以下のレポート課題を与えた。

課題 現在の中学生・高校生と、自分の中学生・高校生時代の共通点（あるいは相違点）を1つ挙げ、それが顕在化する教育現場での課題と、その課題に対する教員としての適切な対応について具体的に論ぜよ。

この課題に対する学生の小論文や議論は、例えば「最近の中学生は自分のスマートフォンを持っている生徒がほとんどで、簡単に答えを得ることに慣れてしまっているの、生徒自身が手を動かして時間をかけて考えられるような授業を行いたい。」などのように、一般的な意見を述べて終わるものばかりであった。具体的にどの単元・課題の授業で、どのような工夫をするのか、なぜそのような工夫が効果的であるかなど、より深い議論を展開する学生はいなかった。

学生は、学校で教員として働くという当事者意

識が低いうえに、論理的思考力・表現力が乏しいため、教育現場を想定した独自の工夫やアイデアを創り出せず、自身の経験などの具体的事例を客観的に捉え直して簡潔に説明したり、それによって論旨を補強して論理的に意見を述べることができない。著者から「誰でも書けるような（考えるような）一般論にならないように注意し、自分自身の言葉でよく考えなさい。」と何度も注意したが、ほとんどの学生は、最後まで改善できなかった。

講義を振り返って、著者自身、学生に対してより単純にこちらが要求していることを伝えるべきだったと反省している。例えば、「1次関数」の授業の具体例として、学生が生徒役となる次のゲームを行う例を示す。

STEP 1 2人の学生A, Bに前に出てもらい、他の学生にわからないように秘密鍵 (a, b) ($a \neq 0$) を渡す。

STEP 2 他の学生にわからないようにAに m 個の基石を渡す。

STEP 3 Aは $n = am + b$ を計算して、他の学生にも聞こえるようにBに「 n 」と伝える。BはAが持っている基石の個数を「 m 個」と当てる。

ゲーム終了後 他の学生に「なぜ、BはAの基石の個数を当てられるのか。また、2人が持っている鍵は何か。」と尋ねる。

そして、次の課題を与える。

課題 講義で行ったゲームを参考にして、自分が授業で行うゲームを独自に考えなさい。

このように創造力の部分に特化して課題を与えるなど、不足している力を一つずつ身につけられるように丁寧に指導すべきだったと考えている。

4. おわりに

2017年度の城西大学理学部数学科（紀尾井町キャンパス）の教育実習の講義を振り返り、その反省点として、学生の創造力・論理的思考力・表現力の不足を改善できなかった点を挙げた。そして、その反省を踏まえ、著者自身の講義の改善案を述べた。しかしながら、この問題の解決は容易ではなく、大学全体で取り組むべき根深い問題であると考えている。

文部科学省（2008）『中学校学習指導要領（平成20年3月告示）』

文部科学省（2009）『高等学校学習指導要領（平成21年3月告示）』

柴田義松・木内剛編著（2012）『教育実習ハンドブック（増補版）』学文社